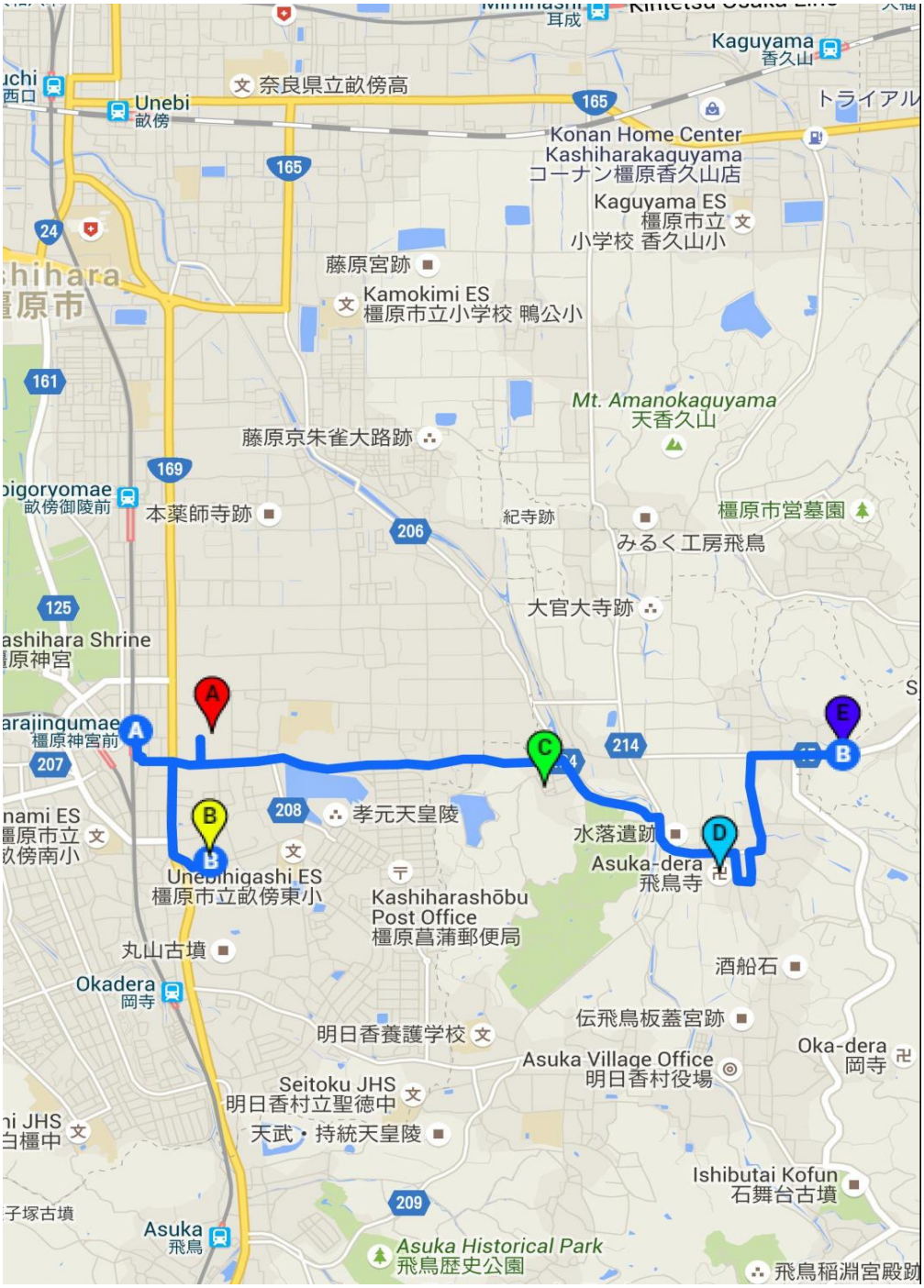
飛鳥時代における韓国と日本の交流

飛鳥時代における韓国と日本の交流　観光ルート



A 厩坂宮 候補地

B 春日神社

C 向原寺

D 飛鳥寺

E 飛鳥資料館

<table>
<tr><th>人名</th><th>韓国との交流</th></tr>
<tr><td rowspan="3">阿直岐
（あちき）

厩坂宮　候補地</td><td>百済からの渡来人。応神天皇の時に，百済王の使者として来日。経典に通じ，太子菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の師となった。

『十五年（404 年）秋八月、壬戌朔の丁卯（6 日）に、百済王は阿直岐を遣わして、良馬二匹を貢いだ。そこで、軽の坂の上の厩（うまや）で飼わせた。そうして阿直岐に任せて飼わせた。それゆえ、その馬を飼った所を名付けて厩坂（うまやさか）という。阿直岐はまた、経典をよく読んだ。それで、太子菟道稚郎子は、阿直岐を師とされた。』
『日本書紀』　巻第十（応神紀）＜現代語訳＞

※菟道稚郎子：応神天皇の皇子（『日本書紀』では皇太子）で、第 16 代仁徳天皇は異母兄にあたる。
※経典：儒教でとくに重視される文献の総称。経書（けいしょ）ともいう。</td></tr>
<tr><td>厩坂（うまやさか）
『日本書紀』にある地名。現在の奈良県橿原（かしはら）市域と考えられる。日本書紀の記事から、厩坂には厩坂池や厩坂宮があったことも知られる。</td></tr>
<tr><td>厩坂宮（うまやさかのみや）
舒明（じょめい）天皇の皇居。『奈良県高市郡志科（たかいちぐんしか）』は、厩坂宮跡は橿原市大字大軽・石川・久米の交界、字丈六の地としている。以下はその有力候補地とされている場所である。
</td></tr>
</table>

<table>
<tr>
<td></td>
<td>

厩坂宮の有力候補地とされる場所
</td>
</tr>
<tr>
<td rowspan="2">王仁
（わに、5 世紀）

B 春日神社</td>
<td>5 世紀前半阿直岐（あちき）の推挙に基づいて、応神天皇の招待により百済から日本に渡来し、千字文（漢字）と論語（儒教）を伝えたとされる人物である。その経書の知識により、応神天皇の信任を受け皇太子の師匠になったと言われている。また、百済文化の伝授を通し、日本の飛鳥文化に影響を与えたと言われている。

『ここに、応神天皇は阿直岐に問うて言われた。「もしや、お前に勝る学者は他にいるのか」。答えて言った。「王仁という人がいます。すぐれた人です」。そこで上毛野君（かみつけのきみ）の先祖である荒田別（あらたわけ）と巫別（かんなわけ）を百済に遣わせ、王仁を召しださせた。』
『日本書紀』　巻第十（応神紀）＜現代語訳＞</td>
</tr>
<tr>
<td>軽島豊明宮（かるしまのとよあきらのみや）
応神天皇の皇居。現在は、奈良県橿原市大軽町にある春日神社境内に「応神天皇軽島豊明宮趾」と刻まれた石碑がある。</td>
</tr>
</table>

<table>
<tr><td></td><td>

春日神社境内にある石碑
</td></tr>
<tr><td>観勒
（かんろく、7 世紀）</td><td>百済の僧。602 年に来日し、暦法・天文地理・方術の書を伝えた。日本最初の僧正（そうじょう）に任ぜられたという。
※僧正：中国の南朝と日本で仏教の僧と尼を統括するために僧侶が任命された官職（僧官）の一つである。</td></tr>
<tr><td>曇徴
（どんちょう、7 世紀）</td><td>高句麗から渡来した僧である。五経に通じ、彩色（絵画）、紙墨の製法、水力を利用した臼の製法を伝えたと言われている。</td></tr>
</table>

	飛鳥時代の仏師。鳥を止利とも書く。6 世紀に大陸から渡来した司馬達等の孫にあたり、父を多須奈という。始祖の司馬達等は継体朝に朝鮮から渡来した大唐の漢人で、わが国最初の仏法崇拝者として有名である。中国南梁からの渡来人と言われるが、梁を南梁と呼ぶことは少なく、おそらく朝鮮半島の出身だと思われる。 飛鳥寺の釈迦如来像や法隆寺の釈迦三尊などの仏像を作った人物として知られる。中国の北魏様式の流れをくみながら、いっそう洗練された作風は止利様式とよばれ、その流れをくむ像を止利派の仏像という。
鞍作鳥（止利） （くらつくりのとり、 7 世紀） 飛鳥寺	**飛鳥寺** 596 年、蘇我馬子が発願して創建された日本最古の本格的仏教寺院。発掘調査の結果によると、ほぼ東西 200m、南北 300mの寺域を持ち、その西南に塔を中心として三金堂を置く大寺院であった。造営には百済の工人があたり、伽藍配置や瓦の文様などにも、当時の朝鮮の仏教文化の影響が多くみられる。 <u>飛鳥寺の屋根</u> 6 世紀末に飛鳥寺の屋根を飾った日本最古の瓦は、百済から派遣された瓦工の指導で造られたものである。軒丸瓦も当時の朝鮮の瓦にそっくりである。 ※軒瓦：軒先に飾られる紋様の施された瓦 飛鳥寺の軒丸瓦 韓国東南里廃寺の軒丸瓦

釈迦如来坐像

飛鳥寺の本尊として、609 年(推古天皇 17 年)に鞍作止利が造ったとされている。飛鳥大仏とも称され、年代の分かる現存の仏像では日本最古のものである。後世の補修が著しく、像の眼や額、右手指 3 本などが当初のものであるほかは健久 7 年(1196)の雷火損傷の後に補修したものとされるが、修理は原型を尊重して行われたものとみられ、面長な顔や、目の形などに法隆寺釈迦三尊に共通した止利様式の仏像の特色が現れている。

参考文献

奈良文化財研究所飛鳥資料館編（2014）「飛鳥資料館案内」

国史大辞典編集委員会編（1980）『国史大辞典』 吉川弘文館

慧慈 （えじ）	飛鳥時代に高句麗から渡来した僧。595 年に渡来し、厩戸皇子の仏教の師となった。仏教を日本に広め、（596 年）法興寺（現在の飛鳥寺安居院）が完成すると百済の僧慧聡と住み、ともに三宝の棟梁と称された。
寺工 太良未太 文賈古子 鑢盤博士 白昧淳 瓦博士 麻奈文奴 楊貴文 陵貴文 昔麻帝彌 画工 白加	日本書紀に、崇峻天皇元年（588 年）、百済国が仏舎利や僧などとともに、寺工2 名、鑢盤（仏塔の相輪の部分）博士 1 名、瓦博士 4 名、画工 1 名をおくってきたとの記述があり、彼らの手によって飛鳥寺が造営された。
味摩之 （みまし、7 世紀） 向原寺	7 世紀初めに百済から渡来して伎楽を伝えた人物。『日本書紀』推古 20 年(612)条に，この年百済人の味摩之が渡来して，自分は呉(中国江南)の地で伎楽の儛を学んできたものだといったので,飛鳥の桜井に安置し，少年を集めてこれを学ばせ，真野弟子と新漢済文という人物がこれを習得して伝えたとある。 ※伎楽：ギリシャまたはインドの仮面劇を起源とした、大きな仮面をつけて演じられる台詞の全くない無言劇。仮面舞踏劇のようなもので、聖徳太子の時代に盛んに行われていたが、大陸から伝わった雅楽などの新しい芸能の伝来によって次第に衰退していった。伎楽で使われた面（伎楽面）で現存するものは、正倉院や東大寺などに所蔵されている。 韓国の世宗大学校日語日文学科教授の李応寿教授は、聖徳太子が築いたとされる日本初の伎楽教習所は、現在の明日香村豊浦であるとする新説を発表。2010 年に現在の向原寺の境内に記念碑が建てられた。

向原寺（こうげんじ）の境内にある記念碑

飛鳥資料館

仏教が伝来した飛鳥時代は、文明開化ともいわれる変革の時代でした。巨大な瓦葺き建物や高層の塔、金色に輝く仏像、きらびやかな荘厳具などに象徴されるように、異国の仏教文化が、最新の知識や最先端の技術とともに飛鳥にもたらされました。中でも、わが国初の本格的寺院、飛鳥寺の建立は、百済の技術的な支援のもとに、在来の技術者集団を動員して造営が進められ、仏教文化が開花する一大契機となりました。

仏教文化の興隆と律令国家建設の進展にともない、首都飛鳥の地では、金・銀・銅・鉄などの金属製品をはじめ、土器・瓦などの窯業（ようぎょう）製品、漆製品やガラス製品など、さまざまな「ものづくり」がおこなわれました。その中核となったのが古代の総合工房「飛鳥池工房遺跡」です。この遺跡は天武・持統天皇の時代に、相次ぐ寺院の造営や宮廷生活などの国家の需要に応じて、仏具や調度品、建築金物や工具、瓦、武器、宝玉類、施釉（せゆう）陶器、貨幣などを生産した巨大な工房群です。白鳳文化を支えたこの工房の機能や技術は、やがて藤原宮や平城宮の生産官氏に引き継がれ、正倉院に代表される天平文化を生み出す母胎ともなりました。

引用文献
奈良文化財研究所飛鳥資料館　(2014)「いにしえの匠たち―ものづくりからみた飛鳥時代」